



読書感想文コンクール入賞作品

最優秀賞

「羅生門」 芥川 龍之介 著

「羅生門」で語られる利己心と人間社会

物質化学工学科1年 橋浦 希佳

中学生の時、芥川龍之介が自殺という形で生涯を終えていることを知り、衝撃を受けた記憶がある。それ以来、彼の思考がどのようなものか興味があり、まずは代表作から読んでみることにした。

読了後、この物語の急展開に感情と思考が取り残されたような感覚を覚えた。舞台の羅生門は災いが立て続く京都にあり、死体の捨て場と化している。そこにある下人が佇む。解雇されてしまい、生きるために盗人になるしかなかったが、なかなか決断できずにいた。その時彼は、ひたすらに死んだ女の髪を抜く老婆を見つける。下人が許されざる悪事に激怒し老婆を押さえつけると、老婆は、かつらを作って売るつもりだったと弁明した。その女はこのような仕打ちをされても当然な、詐欺をしていた人間であり、自身のその生涯から、生きるための多少の悪事は仕方がないことにも理解があるだろう、と老婆は説明した。この話を冷然に聞いていた下人に、ふつふつと盗人になる勇気が沸き上がる。餓死という選択肢は彼の頭から消え去る。老婆の論理では自身も許されるはずだと、ためらいなく老婆の着物を剥いで蹴り倒し、下人は逃亡した。

人間の暗い部分が浮き彫りになっている話だった。老婆も下人も利己的な行動を選択し、更に、その選択は間違っていないと自分に言い訳をしている。とても醜いことだと思ったが人間社会では当たり前のことでもあると感じた。私もいざ生死を迫られた状態では、どんな悪事をしてでも生き長らえたいと思うに違いない。罪悪感があっても、仕方がないと割り切り正当化するはずだ。私達は、利己的思考ではなく利他的思考を持つように育てられてきたはずである。道徳的観点から見れば、例え餓死しようとも悪には手を染めない、つまり、自分の欲望よりも周りの人を大切にする選択をするべきである。しかし、その理想像はこの社会には存在しない。道徳心に溢れた理想像を掲げる人間に潜む、利己心の醜さを感じさせられる。この本を読んだ後、生活の中で自分がいかに利己的思考をしているか、些細なところで気づいてしまう。人には自分を美化する癖があるために、無意識の正当化に自覚がないのかもしれない。人間が、道徳心のある程度持っているつもりで実は利己心で行動しているとすると、この社会が虚しく思えた。

ただ、この本が「利己心ではなく道徳心を持とう」と伝えているかという点と全く違うと思う。利己心は、完全な悪ではない。利己心によって個人が守られているからだ。これによって、老婆も下人も自分の命を大事にできたという見方もできる。この本は、ただただ、道徳心を理想としつつ利己心を捨てきれない人間社会の現実を突きつけたかったのではないかと思う。その社会が悪いもので、改善する必要があると伝えたいのではない。盲目になりがちな私達に、実際は違うのだと教えようとしているように感じた。

「羅生門」を読んだ後、自分を含めて人間の生き方の暗い部分に目を向けさせられ、過去に対する自信がなくなり、これから先の人生が少し不安になった。後味の悪さが長引く話だった。この本は勇気を持てたり、人との繋がりの大切さを感じられたりする本とは違い、現実と自分の生き方に冷静な視点を持てるようになる大切な一冊となった。読者によって、印象も考えることも大きく異なると思うので、この本を読んだことのある人と感想を語り合ってみたい。

優秀賞

「はてしない物語」 ミヒャエル・エンデ 著

今、大切にすべきこと。

電気工学科 1 年 畑中 穂希佳

現代社会において、私達は大切にすべきことを忘れつつある。普段の生活の中では、「慣れ」により気付くことが難しい。私自身、意識をしたことがほとんどなかった。

私が本当に大切にすべきことを理解するきっかけとなったのが、「はてしない物語」だ。この物語では、主人公のバスチアンが本の世界に入り込み、様々な冒険を通して成長する。バスチアンの冒険から学ぶことは多く、感心した。その中で、これから大切にしていこうと感じたことが三つあった。

まず一つ目は、自由に想像することだ。子供の頃と違い、大人になるにつれ自由な想像力を手放す人が多くいる。想像力は、物事を様々な視点で考え、アイデアを生み出すことに役立つ。バスチアンは自身の想像力で、本の世界ファンタジエンを救ったが、現実であっても想像力が何かを救うことが多々ある。私は、バスチアンが冒険していく様子を想像してみると、より物語に引き込まれ、頭が柔らかくなった気がした。

二つ目は、「本当」の友達を持つことだ。バスチアンの友人アトレュは、拒絶されようとも、バスチアンのことを常に考え行動を起こした。今の世の中には、上辺だけの付き合いである友達や、本音を言い合えない友達というものが存在する。しかし、そのような関係は「本当」の友達と言えるだろうか。それに比べ、バスチアンとアトレュの友情は本物だと感じた。互いに信頼し合い、時には間違った行動を咎め正しい道へと導く関係こそが「本当」の友達と言えるのだと思う。相手のなすこと全てを肯定することは、友達としてするべきではない行動だろう。

最後に、最も大切にすべきだと感じたことは、ありのままの自分であることだ。バスチアンは世界を救った後、何でも望みが叶う道具を使い、多くの望みを叶えていく。不器用で臆病な太った少年であったバスチアンが、勇気のある強く美しい少年へと変わるのだ。しかし、バスチアンの心が満たされることはなく、最後はありのままの自分に戻ったことを喜ぶことになる。周囲の目を気にし、自分にコンプレックスを抱える人が世の中に少なからずいるが、そのようなコンプレックスも含め自分という唯一無二の存在をつくっているのだと認められたらどれ程良いだろう。悲観するのではなく、受け入れ、ありのままの姿で人生を楽しむことは、自分を解放し成長させることにつながる。私は、バスチアンの体験からそのようなことを理解した。

少年バスチアンの冒険からなる物語は、私に大切にすべきことを気付かせてくれた。『自由に想像すること』、『「本当」の友達を持つこと』、『ありのままの自分であること』。どれも、日々の生活を豊かにすることばかりだ。最近は様々なものが発達してきている。それにより、与えられた情報をそのまま受けとめ想像力を働かせなかったり、本心を知らぬまま画面上でだけつながった信頼し合えていない友達を作ったりする人も多い。また、他人と自分を比べ、自分の嫌な所ばかり目をつける人もいる。大切なことをないがしろにしているのだ。そのような今だからこそ、私は物語から学んだことをしっかりと頭に入れ、生きていきたいと思う。まずは、ありのままの自分であることから頑張ろう。

「色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年」 村上 春樹 著

人の別れ ―色彩を持たない多崎つくると彼の巡礼の年―

電子制御工学科 2 年 岩崎 史芳

君とはもう二度と会いたくない。突然友達に告げられた時、人はどうなるのだろう。人々は「別れ」というものをひどく恐れる。なぜ「別れ」を恐れるのか。理由は人によって様々だろうし恐怖を感じる程度も異なるのだろう。ただ、私に関してはこの問いに明確な答えはなかった。漠然とした不安がある、ただそれだけと何も感じず受け入れてきた。己がいる人間関係を当たり前だと思いつつも、それが崩壊することをおそれ日々を過ごしてきた。

主人公多崎つくるとは高校時代を、仲の良いシロ、クロ、アカ、アオとそれぞれ姓に色のつく四人との五人グループで過ごしてきた。時が経ち一人だけ故郷から離れた主人公は突然その四人から理由も告げずに絶縁される。この「別れ」のショックでつくるとは死の淵を一時さ迷う。そこから立ち直った頃にはもう以前のつくるとは全くの別人のようになった。そんな出来事から物語は進む。

私は前述した主人公の「別れ」にどこか言葉に表せない美しさがあるように感じる。小説では主人公は様々な別れを経験する。どれもが残酷で哀しい。なのになぜか四人との別れだけは綺麗だと思えた。

主人公の五人グループは高校時代を共に過ごしたが、それは友情という名の一種の束縛のように見えた。五人という共同体が存在することに価値があり、それを崩壊させないための暗黙の了解がそこにはあった。その共同体は見事に調和し、一切の隙間もなかった。あまりにも完璧すぎたのだ。いつ亀裂が生じてもおかしくはなかった。実際少しの綻びでこの五人は壊れてしまった。

つくるとの追放以降、残った四人は次第にばらばらになっていった。時代の流れに吞まれて摩耗し、最後には消え去っていた。あの美しく完璧な共同体が、存在していたという記憶と事実だけを残して。

それから時が経ち、グループの一人のシロが何者かに絞殺され死別する。五人グループが解体して以降、それぞれはつくるとシロとの別れを経て己の道を進んでいった。

この別れにはそれぞれにとって異なる意味があった。しかし、いずれの場合においても、「別れ」はある意味での解放であったように感じる。共同体という束縛からの解放、形は異なるものの各々は自由というものを手に入れていたように思えた。それが私の目には非常に美しく映った。

共同体とはそこに属する人の、自身が存在していることの一種の証明であると本書を読んで感じた。その理論で言えば、人間にとって「別れ」というのは自分の存在が消失していくことを意味する。「別れ」を恐れるのはそれが原因だろう。自分の存在が少しずつ消えてしまうように感じるから。これが私の答えだ。

本書を読んで感じたことが他にもある。人々が「別れ」を恐れるのは当然のことだ。しかし、別れを恐れ、心身を疲弊させてまで日々を過ごす必要は無いのではないか。確かに「別れ」は時に残酷で哀しいものだ。昔存在した相手との関係が目の前で消失していくのは見ていて辛いものである。でもそれは一種の解放、そして新たな世界へ進む一歩とも言える。そう捉えて、「別れ」に酷く怯えず受け入れていくべきだ。

これからの私のおそらく長い人生の中で、何度も「別れ」を経験するだろう。その時はそれをまっすぐに受けとめ、歩みを止めず、振り返ったときに自分でも美しいと感じられるような「別れ」にしてみせよう。

「よだかの星」 宮沢 賢治 著

星の温度

情報工学科 2 年 三原 瑚桜

一年前、友達が好きだと言うので宮沢賢治の本を読んだ。どの話も面白く、宝石を散りばめたような文章に圧倒された。すすきから滴る露。黄金色の溶岩。銀河の水の燐光。賢治の世界にはさまざまな光が登場する。鉱物の例えが多いからだろうか。あたたかく包み込むようなものではなく、どこか冷たくて鋭い、私たちが突き放すような光を連想することが多かった。

「よだかの星は燃えつづけました。いつまでもいつまでも燃えつづけました。今でもまだ燃えています。」収録されていた話の中で一番美しいと思った『よだかの星』の、最後の場面だ。特に「今でもまだ燃えています。」の一文に鳥肌がたった。今でもまだ燃えている。よだかが急に現実に来た。読み終えた瞬間、何十光年先にいるよだかが私を見ている気がして驚いた。

私はこの一文で『よだかの星』を好きになって、以降たびたび読み返すようになった。いつ読んでもこの描写には感動させられる。しかし、それと同じくらい、これで本当に良かったのかという疑念も湧いてきた。天の星々に相手にされなかったよだかが、自力で星になるという願いを叶えたところはいいと思う。しかしよだかが鳥社会に馴染めずに一人で死んでしまったのも事実で、それに対する虚しさもある。よだかが星になる結末で本当に良かったのか。私がよだかと同じ立場だったら、今までいじめてきた鳥共や、いじめを許してきた社会に復讐しないと気が済まない。

私はあなたを嫌ったりしない、遠くへなんか行かないでと声をかけたくなくなったが、弟の川せみですら引き留められなかったのだから無理な話だろう。そして恐らく、よだかはいじめを苦にして死のうとしたのではない。よだかは自分が甲虫を食べることと、鷹が自分のために無駄な殺しをすることがたまらなく辛いと言った。この感情がよだかを死に追いやったのだ。当然のことながら、生物は何かを食べなければ生きていけない。それすら拒否できるほどの優しさを持ってしまったよだかにとって、現世に救いがあるとは思えない。この考えに思い至ったとき、私は妙に晴れ晴れした気持ちになった。誰も傷つけない星々の世界こそよだかには合っていたのである。

私はよだかほどの善性を持ち合わせていないが、共感できる場所はある。私は人と話すのが苦手だ。頑張ろうとすると空回りするし、私の存在そのものが場を悪くしていると感じて、消えてしまいたくなるのはしょっちゅうである。私もよだかのように、星々の仲間入りができたら良かったのだが、人間は誰かと関わらなければ生きていけず、孤独に徹する勇気を持たない私は結局世間との交わりを選ぶ。あの結末は、よだかにとってはハッピーエンド、私にとってはバッドエンドだ。生きづらい世界で生き抜く術を教えてくれなかった。よだかは私にとって、永遠に手の届かない星であり続ける。

ただ、よだかの美しさも、同様に永遠であり続ける気がする。それはよだかが最期まで力を振り絞ってそらを目指したからだ。ならば私も、自分の力を尽くしたと言えるまで頑張ってみたい。心の中で熱い星を燃やしてみたい、と言うのはカッコつけすぎだけど、しかしそうすれば、私のような者でも小さなひかりを出す、かもしれない。そのひかりが誰かを照らし、導くことがあったとすれば、もう何も言うことはない。